
ネタまみれの三番目

東方人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネタまみれの三番目

【Nコード】

N3759R

【作者名】

東方人

【あらすじ】

これはネギ達が京都への修学旅行へ行く3ヶ月前の会話である。

フェイト・アーウェルンクスとデユナミス。

二人の会話は常にネタにまみれていた。

※これはネタです。超絶駄文のキャラ爆砕。こんなフェイト嫌だ！
とか思う人は即ブラウザバックで緊急回避してください。もう一度、
ネタです。

(前書き)

「……………やあ、来てしまったんだね。まずここまで開いた段階で君は勇者だよ。でも、ここから先は勇気だけでは進めないカオス空間さ。目が腐らないように慎重に進むといい。ただ、過度な期待はしない方がいい」

「理想を抱いて溺死する羽目になるからね」

———F a t e A v e r r u n c u s
———パソコンで錬鉄の英雄の最後を読み進めながら。

——Fate Avernus side

「任務だ。英雄の子供の実力を見極めてこい」

目の前で雄々しくふんぞり返ったデュナミスが言った。

4

今この場所には、僕ことフェイト・アーウェルンクスとデュナミスだけ。

つまりは、必然的に僕に与えられた任務ということになる。

僕は読み掛けの『めだかボックス』をパタンと閉じ、今のデュナミスの言葉を吟味する。

………は？

英雄の子供って、普通に考えて強いよね。それもめっちゃ。

しかもナギ・スプリングフィールドの子供でしょ？

………すっごい嫌なんだけど。出会い頭に『千の雷』とかしてきそうだし。現に二番目はナギ・スプリングフィールドに遭った瞬間『千の雷』×2されたらしい。ということは、僕は三発喰らうことになる。

———死ぬる。

手持ちのライフカードは三枚。

一枚目、『命令実行』

「トラップカード『人形には人権すらない』を発動。これによりお前は拒否権すら発動出来ずに、従わなければならない」

……………横暴すぎる。

「それなんてチートカード。禁止カードにするべき」

「ついでに魔法カード発動」

「聞けよ」

「魔法カード『問答無用』……………早く行け」

「……………分かったよ」

あとで絶対下剋上してやんよ……………痛いのは嫌だから止めよう。

「……………フェイトたんハアハア」

……………背後から凄い荒い息が聞こえてくる。悪寒もバリバリ背筋を凍らせてくる。

振り向きたくないでござる。ものすごく見たくないものがある気がするよ。

「どうした？ 早く行ったらどうだ」

「……………」

……いや、アンタ背後見えてるでしょ？　どす黒いピンク色の空
気で汚染されてるのが分からないのかい？

そう口パクで伝えようとしているのに、

「『いや、まだ僕のターンだ。ドロー！！………意味不明のカ
ードだ。これでどうやって戦えばいいんだ！？』だと？　サレンダ
ーすればいい」

遊戯王から離れろ。

「というか早く行け。我は今から若本声のリリカルなのはを見るん
だからな。お前の相手をしている暇はない」

「僕が言うのもなんだけど、デユナミス、君も仕事しろよ」

「働きたくないでござる」

きつと草葉の陰で創物主泣いてるだろうね。

「僕だって働きたくな——」

「お前のその幻想（Dドライブ）をぶっ壊す」

「行ってきます」

ヤバイ。ムカつきすぎて、右脳と左脳が割れて、切り開かれたその隙間から、何か鋭く尖ったものが頭蓋骨の内側へ突き出てきそうだ。思わず背中から黒い翼を噴射したくなる。

「ちなみに、葉ならもういないぞ」

「気付いてたならもっと早く言ってくれないかな」

「我に死ねと？」

……………そんなに病んでるのかい葉は。

いつか監禁されそうで怖い。あとは知らぬ間に既成事実とか作られそうだ。

「オヤシロ様すら裸足で逃げ出すヤンデレ具合だ。羨ましいぞ。代わりたくはないがな」

ヤンデレはL5発症を越えると？

死ぬって。四肢切断とか嫌すぎる……………。

「そういえば、英雄の子供って旧世界にいるらしいね。今回は僕一人で行っていいのかい？」

「栞を連れていくか？」

「貴様僕に死ねと言うか」

「なら一人でいけばいい」

旧世界一人旅……………ヒイイイヤツホオオオオオオ
！！！！どこへ行くのか。やっぱり秋葉原には行きたいな。

「……………土産は『フェイトたんフィギュア』で頼む」

「――――」

「……………お前じゃないからな。そこで吐こうとするな」

思わず口に手を突っ込んで吐きそうになったじゃないか……………
おえ。

「くっさ!! お前本気で吐いたな! あと、片付けしないと回収
されるぞ」

なにそれこわい。

とりあえず魔法で砂にしておこうか。

……………あれ?

ないぞ。

「遅かったな」

………なにそれ怖い。

「多分暦だろうな。アイツのアーティファクトはその気になればリアル『十六夜 咲夜』が可能だからな」

「まさかの二人目。僕の明日はどっちさ」

「よく思い出せ。お前の従者は焰以外変態かヤンデレだ」

「オーノー」

絶望した。

まともな従者が一人だけとか絶望した。

「ちなみに、焰はツンデレと見せかけてクーデレかもしれないぞ？」

「ヤンデレの万倍マシだよ。僕はこのままだと生きたまま死ぬんじゃないだろうか」

みんな僕の一部を抱えて生きるとか……………。

ヤバイ。僕に救いが存在しない。

本気で旧世界に逃げよう。

魔法世界とかどうでもいいよ。それよりも僕の命だ。

「じゃあ行ってくるよデユナミス。『もう探さないでください』っ

ていう置き手紙あげるから」

「定期的に連絡入れろ。じゃないと追ってくるぞ。そして我もまだ死にたくない。今回お前を旧世界に送るのだって、代償にケツの穴がちよー痛いんだからな」

………いったい何されたんだい。

「いいのか？ 聞いてしまって。戻れなくなる――――」

「やめろ」

とか心読むのやめてくれ。

「なんかもう一人で行くと、即BADENDに移行しそうな気がするよ。焰だけ連れていったいいかい？」

「頼むからやめてくれ。焰が居なければ我が三日後にはDEADE
NDだ」

そんな土下座しなくたって……。しょうがないな。

土下座をやめ、デュナミスは咳払いすると、

「お前に限って早々負けるとは思わないが、まあ、死にそうになっ
たらすぐに帰ってこい」

「デュナミス………」

なんだ、君はこんな僕のことを心配してくれるのか。なんだろう、
涙が出てきて――

「死ぬなら土産を発送してからな」

僕の感動を返せ。びた一文まけないから。

思わずフックの軌道を描く拳をデュナミスに叩き込む。以外とキレていたらしく、踏み込みの震脚で大理石の床が蜘蛛の巣状に罅が入り、

「むおう!!」

僕の拳とデュナミスのガードが衝突した瞬間、轟音とともに粉塵が巻き上がった。

多分デュナミスはまだ無傷。そして僕の怒りも収まらない。

粉塵を吹き飛ばすようにデュナミスを中心に柄のない黒く耀く剣を無数に配置する。

一本ぐらいどっか刺され。

「いきなり何をするテルティ——」

「その名で僕を呼ぶな。『千刃黒耀剣』せんじんこくようけん」

「むおおおおおお!？」

デュナミスは飛来する漆黒の短剣を奇声と共に魔力を込めた拳で叩き落としていく。

あ、腹に刺さ————

「ふん!!」

筋肉で弾き返すとか、僕の目を腐らせる気かい。

「ふんふんふんふん!! 私筋肉旋風に死角なし!」

なにそれキモい。主に体がキモい。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト」

「って待て! 詠唱呪文を始めるな!!」

まだ僕のバトルフェイズは終了していないよ。バーサーカー魂も真っ青さ。

「おお、地の底に眠る死者の宮殿よ。我らの下に姿を現せ」

本来なら上空から大質量の一枚岩の石柱を投げ落とす魔法だが、僕は破城槌のように真横に出現させ、

「冥府の石柱」

デュナミスの腹をぶち抜くように放った。

「んま……………つぁ、ちょぎっ!!」

最後までネタを貫いたデュナミスは壁にめり込んで、石柱に蚊のようになぐられた。

……………もう一回ぷちっと。

「まそっぷー!!」

それは悲鳴じゃなくて掛け声だよ。

「なかなか強くなったな」

「……………」

君はなんで何事もなかったように隣にいるんだい？

「すべてフィクションだからな」

そういつてデユナミスは僕がさっきまで読んでいた『めだかボックス』のページを捲る。

………再現するためだけにかい？

「というか、そんなことのために勝手に“リライト”使わないでも
られないかな」

「今使わなくて何時使う？」

「少なくとも『大嘘憑き』を再現するときじゃないよ」

「私の人生は虚構リフル マンガから誕生する」

他誌に飛ぶなよ。

「さて、いい加減終わりにするぞ。フェイト、旧世界へ向かえ」

空気を真面目な雰囲気に変えてくるデュナミス。

そうだね、こんなバカ話はもう止めよう。でも、これから少しの間は出来なくなると思うと……………寂しく感じるモノだ。

———この身は人形だというのに、

いつから心を持ったのか———

「……………」

僕は何も言わずに、デュナミスに背を向け、扉へと足を進める。

「……………でわな」

小さな別れの言葉に、振り向かずに右手を上げた。

そして、扉を開けた。

「……………そういえば、デュナミス」

僕はふと足を止める。

「なんだ？」

疑問に思わないのかい？

「仮面の中の全裸」はやめた方がいい。空気が締めまらない」

「これが私の普段着だ」

着てないだろ。全裸マン。

デュナミス目掛けて“砂の一矢”をぶつけ、部屋から出た。

ああ、本当に締めまらない。

僕は緩む唇を真一文字に締め、両の手をポケットに入れて回廊を歩き出す。

……行こうか、旧世界。

まずは、

どうやってヤンデレ従者を撒くか、考えよう……。。

(後書き)

ててれれってってってー。

読者様の我慢強さが200アップした。これによってどんな駄文でも笑って受け流せるようになった!!

はい、どうも。後書きまで読んでくれる読者という名の勇者。

最近のネギまでフェイトが妙にカッコいい。そう思った俺たちはアホにしたくなった。

……………そう思って書いたらこんなになった。

反省も後悔もしないぞー!!!

だが、謝る。すいまんえん。

ちゃんとネタがネタになってるか凄く心配。多分他作ネタが十個ぐらいあるはず。すべて分かったら、もうネタなしでは生きられない体になっているさ！

身体はネタで出来ている、っと。

こんな誰得か分からない作品を読んでくれてありがとうございます
た。

需要があれば供給する……………短編じゃなくするとか。

……………需要はないだろうな。

では、これにて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3759r/>

ネタまみれの三番目

2011年7月6日21時37分発行